

平成28年8月13日

No.146

(オリンピック選手)

今日まで、リオデジャネイロオリンピックの日本のメダル数、金7、銀3、銅14の計24個と毎日メダル奪取し、私達の喜び、感動、嬉しさを、楽しみも与えてくれます。卓球で銅メダルを掴んだ、舞田市出身の水谷隼選手は、5歳で卓球を始め、小学2年で全国1位になると、朝も夜もラケットを振った。卓球経験のある父母の指導は厳しかった。「怒られた記憶しかない。心の中でやめたいと思っていた」「スパイクだったから嫌々でも練習した。絶対に試合に勝つて、親を見返してやる気持ちにだった」その気持ちから、嫌いなはずの卓球に打ちこむ源になった。中学2年の時、単身ドイツ遠征したのが転機となった。「これまでの世界からガラッと変わった。自信になったし、卓球が楽しくなった」「強くなるためなら、どんな環境でも我慢できる。それが人と違う。むしろ孤独が好きなのかもしれない」練習では群れることを嫌う。「仲良しクラブでは強くない」オリンピックに出る選手達は、特別に才能を持った人達であると思います。ひとつのことに打ちこみ、苦しくても、やり抜く諦めがない。運動能力、厳しさを半歩にする、なごなご、ずばぬけています。しかし凡人である私々でも学ぶところがあると思います。世界一の金メダルを目指さなくても、地域一の金メダル、最低でも6位ぐらいに入賞する。何かひとつのものをみつけ、厳しい練習(学び)をする。厳しい世界に飛び込む。厳しい指導を受ける。そして自信がつか楽しくなる。あれもこれでもなく、まずはひとつのことだと思っています。子供でも、スポーツ、勉強で、優秀な成績を上げる子は、厳しい指導を当然と思ひ、努力する。だから、入賞できる。私々は、楽々楽々おめでたいです。成績は土からず決格となります。オリンピック選手に学び、自分のレベルを一つ上げる努力、厳しい努力をいかにこなし、お客席に感動を与え、メダルを取りこがでます。厳しいことは、自分の為を思いたいものです。 高林幸裕